

陸軍 航空

ジャワ島マラン野戦航空廠勤務

山形県 深田 正治

私は現在、山形新幹線の発車駅である新庄から奥羽西線に乗り換えて古口駅のある、古口村の農家の長男に生まれました。姉が四人、第一人、妹一人に両親を加えて十一人の大家族でした。父親は農業のかたわら桶屋を営んでおり、その副業収入のためか当時としては割合豊かな生活だったようです。子供のころは父の仕事が面白く、仕事場へ行って「危ないからあっちへ行っている」とよく叱られたものです。

青竹を割って薄く削りタガを作り、分厚い板の

両面を丹念に削って、上下の幅を調整して丸形に組み合わせ、底板をはめ込んでタガをかけて順番に締めに行く。糊など一切使わず、出来上がった桶は水を入れても絶対漏れない、今思えば素晴らしい技術だと関心しております。

私は高等小学校を卒業してしばらく農業を手伝っておりましたが、その後、神奈川県横須賀の海軍航空技術廠へ就職しておりました。

昭和十八（一九四三）年四月、徴兵検査を受け第一乙種合格となりました。乙種でもいざれ召集令が来るものと思っておりますと、昭和十九年三月に「甲種に編入となり四月一日、現役兵として下関に集合せ」との令書が来しました。

一旦山形の家に戻り、出発の当日、親兄弟や親

戚、地域の方々や婦人会など大勢の方に見送られて、古口駅から下関へ出発しました。古口村からは私一人だけでした。

集合地で軍服など支給されて、港から貨物船に乗り朝鮮の釜山港へと出港しました。誰かが「制海権はアメリカに取られているから、潜水艦に見つかれば一巻の終わりだ」と言っていました。甲板へ上がると、今問題の竹島が見え、波は荒かったが、その割りに船は揺れませんでした。

幸い敵潜水艦も姿を見せず、無事に釜山港へ入港。釜山駅からは有蓋貨車で外を見ることはできず、平壤（ピョンヤン）駅で下車して、歩いて航空技術特別教育隊へ入隊しました。一緒に入隊したのは二十二人で、驚いたのは全員が航空技術者ばかりだったことです。

例えば入隊前の職場が中島飛行機、三菱飛行機さらに川崎飛行機などの人で、加えて陸軍航空廠と海軍航空廠からも数人徴集されて来ておりました。私は油圧関係でしたが、他の方も機械、整備、

エンジンプロペラ関係と言うように、全員で飛行機の修理や整備が完全に出来るような人容でした。このように専門分野の技術者ばかりでした。

入隊して数日すると初年兵教育が始まり、内容は上官に対する敬礼の作法とかで、小銃も無いので戦闘訓練もなく、この初年兵教育はたった一カ月、一期検閲が終わると同時に南方派遣の命令が出ました。

五月一日、平壤駅から汽車で釜山港へ、さらに船で下関へ戻った五月三日、私たち二十二人は貨物船に乗せられました。ここでは改装した航空母艦、駆逐艦、海防艦、それに病院船まで加わり船団を組み下関港を出港しました。

船団は一路南下して中国大陸沿岸寄りを航行しました。当初台湾へ行くのだと言われていましたが台湾には寄港せず、私たちは「この分ならフィリピンか」などと話していますと船団はバシー海峡に差し掛かりました。

すると雲の切れ間に見えた黒点が急降下してき

ました。敵空軍と潜水艦が空と海から攻撃して来たのです。慌てて甲板へ駆け上がりまずと改装航母が真っ先にやられて煙りを吹き上げ沈没して行き、続いて病院船も傾いて沈んで行く、途端に乗船の足元がぐらつき、船底から大きな爆発音が聞こえてきます。その後は無我夢中で定かな記憶はありません。

幸い海が浅かったので船は着底し、上部が相当の部分海面から出ていたので助かったのです。何につかまっていたかも知れませんが私には全く記憶にないのです。敵機が引き上げて間もなく日没となり周りも薄暗く、このままどうなるのかとだんだん不安になって来ました。

ほとんど周りが見通せないほどに暗くなって来たとき、マニラ湾方面から数十隻の「カツオ船」が救助に来てくれたお蔭で、私たち二十二人は全員怪我も無く助けられました。病院船は赤十字の大きな旗を揚げていたのですが、無差別攻撃で沈没しました。「カツオ船」とは海軍が救助用に何

十隻も準備していた船で、底が浅く魚雷攻撃を受けないと言われている船です。

攻撃された地点がマニラ湾に近く海が浅かったこと、飛行機からの爆撃で無く、魚雷攻撃だったことなど運が良く、本当に命拾いとなり、今でも神仏に感謝しております。

マニラからは二十日ころ、ジャワ島のスラバヤへ移動しました。軍籍上はどうなっているのかわかりませんが、私たち二十二人の航空技術者には格別の作業もなく、ただ移動させられるだけのようでした。

そうしている内に七月末ころ、マラン島の第二十五野戦航空廠へ転属命令が出ました。マランとはジャワ島の中央部にある大きな街で、街から四キロほど離れた所に飛行場があります。この飛行場は戦前オランダ軍が所有していたとのことで、マランの街中に第二十五野戦航空廠があつて私たち二十二人の技術者はそこへ勤務しました。と言っても制空権も制海権も無くなった日本から飛行

機は一機も飛んで来ませんでした。毎日ただ時を過ごすだけです。

入隊以来小銃一丁渡されたこともなく、廠内勤務中は作業服で階級章もなく、ただ外出するときには軍服で階級章もつけることが義務づけられておりました。また二十二人も飛行機の修理から点検整備の技術を持っていると言ってもどこへ行っても一機の飛行機にもお目にかかれない。だから航空廠へ勤務しても何の仕事もなく、何のために転属させられたのかと言いたいくらいでした。

しかし食事だけは満足出来る内容でした。軍隊では航空隊が一番うまい物を食べていた、二番目が海軍、陸軍はうまいまずいよりも食料がなかった。憲兵隊も結構良かったようだ、などと食い物の恨みは戦後まで話になりました。しかし南方の玉砕した島やフィリピンとかニューギニヤ等の陸軍部隊は戦場で戦死した方よりも餓死した方が多かつたくらいだなどと言われております。私たち二十二人の技術兵たちは何も知らずにマ

ランの第二十五野戦航空廠に勤務しておりましたが、昭和二十年八月十五日、アメリカの短波放送で「日本がポツダム宣言を無条件で受け入れた」と言う放送を聴いて日本の敗戦を知りました。私たちはその前から同放送で、日本内地の主要な都市や特に工場地帯とか東京や大阪なども焼野原と化したことも、広島、長崎の原子爆弾が投下されたことなど聞いていましたので、ついに来るものが来たと言う感じでした。

八月十五日正午を期して天皇陛下の全軍に対する終戦のお言葉も聴くことが出来ました。長い戦争がやっと終わった、これで家へ帰れると皆ほっとした気持ちでした。入隊以来武器一つ持ったこともない私たちは、一介の技術屋ではありますが、軍人意識だけは持っていたと思います。

敗戦になっても何の変わりもなく航空廠で過ごしておりました。大分たつてからイギリス軍がジャワ島に上陸して来て、マランの街に進駐してきました。そして我々はイギリス軍の指示によりジ

ヤワ島の近くにあるガラン島に移され、島の山奥にある捕虜収容所に収容されました。

この収容所は前にドイツ軍の捕虜収容所だったと聞かされ、わずかに離れた所にドイツ兵のお墓がたくさんあって、薄気味悪い感じがしました。

収容所へ入れられてからの食べ物は大分粗末で、うんざりさせられました。収容所では殴られたり蹴られたりの暴行はありませんでしたが、二カ月、三カ月と日がたっても帰れる目途もなく、帰れる話もなく、だんだん心細くなってきました。しかし当初からの二十二人が一緒なので気はまぎれました。

来る日も来る日も、故郷や食べ物の話ばかりで、ビールや酒、ときには飛行機の話などもしましたが、敗戦後の日本はどうなるだろうなどの話を交えて時を過ごしました。

ちょうど一年ほど過ぎた昭和二十一年八月二十日になって終戦直前に進水したと言う日本製の航空母艦「桂木」が迎えに来てくれました。私たち

二十二人は、終戦になっても航空関係に縁があるんだと大喜びをしながら私物をまとめて乗船しました。

船は太平洋を一路日本に向けて航海し、五日か七日間ほどで日本が見えて来たときは嬉しくて天にも昇る気持ちでした。広島県の宇品港へ入港して元気に上陸し、復員手続きを済ませてから皆と再会を約して帰郷の汽車に乗りました。帰宅の旅費はいくらももらったか思い出せません。

広島市は何もかも焼けただけ、無残な姿でした。その惨状を目の当たりにして改めて敗戦の現実を認識させられました。途中の各地の都市も目茶苦茶に破壊されていましたが、とくに東京の惨状は言葉になりませんでした。完全に復興するまでは何十年かかるだろう、本当に日本は立ち直れるだろうか等と不安な気持ちでした。

乗っている汽車の窓ガラスは割れ、座席のシートは切り取られ、トンネルへ入ると煙りが車内に立ちこめ、乗客の顔もうす黒くなる始末でした。

汽車が駅へ到着すると乗客は我先に争い、中には窓から乗り込む者もいました。山形県と福島県の県境にある栗子トンネルでも煙りが入ってきて、相当な登り坂のため前後に連結した機関車も一気には登れず、行きつ戻りつを繰り返してやっと通過した有様でした。

当時は上野―山形間は七時間、今は二時間半で東京まで行きます。新庄駅から奥羽西線で古口駅で下車、我が家へ帰りました。二年四カ月ぶりの帰郷でしたが家族はみんな元気でした。我が家へ帰ったのは昭和二十一年八月二十二日だと思いません。

直ぐ下の弟は北部第十八部隊に入隊、内地勤務だったので終戦になってから間もなく復員し農業を手伝っておりました。父親の副業である桶屋は材木が配給統制前に確保していたものを利用して続けていました。タガの材料である竹は統制外で自由に買えました。漬物用、味噌桶など二年も三年も仕込んで置く農家もありましたので桶屋は結

構忙しく商売繁盛だと喜んでおりました。

農村は空襲も無く割合安心して暮らせたようでしたが、食料は配給統制で塩なども不足し、米は作っているが生産農家は米の供出の割当てもあり、自分の家の飯米が足りなくとも割当て数量を守らなければならなかったのです。それでも農家は豆とか芋とか大根とかはあったのですが、一番苦労したのは野良着だったようです。衣料の配給などは何年もない、日本全国そんな状況だったのです。

復員した翌日から働け働きの毎日でしたし、私ばかりではない農村に復員した方は皆同じだったのではないかと思います。冬期間は出稼ぎして昭和二十八年結婚しました。長男、長女、次女の三人の子供を育てて今では皆家庭を持ち、私たちは長男夫婦と同居して余生を過ごしております。